
儀式の夜

白亜零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儀式の夜

【Nコード】

N8089X

【作者名】

白亜零

【あらすじ】

ある高校に通っている、女子高生の黒輝禮夜。いつもの様に退屈な日々を過ごしていた。

しかし、ある日を境にして起きる殺人事件。これからどうなってしまうのか…

01（前書き）

初めまして。

初めて書く小説なので、誤字なども多いかもしれませんが、読んでくれると幸いです。

予定が狂わない限り、土曜日に更新します。

曇っていた。

今にも雨が降り出しそうな梅雨空を黒輝^{くろきゆきや}禮夜は眺めていた。名前でよく勘違いされるが、一応女だ。

正直言つて、つまらない。何もかも。高校生活も思つたより楽しくなかった。今行っている授業の物理は特におもしろくない。

この先生の授業は長いし同じことを何回も繰り返して説明する。しかも生徒いじめをすることで校内の生徒の中で有名だ。かなりたちの悪い奴と言える。

こいつの名前は悪谷^{あくたに}。勿論、生徒たちには嫌われている。

正直言つて、眠い。今すぐにでも眠れる。

でも、こいつの授業じゃ眠れない。理由は…

「おい！そこで寝ているのはだれだ！河崎か！河崎、お前この問題解いてみる！」

「え！えつ…と…」

…まあこういうことになるからだ。ちなみに河崎のフルネームは河崎^{わさき}伸太である。

「もう、いい！後で職員室に來い！！じゃあ黒輝、お前答えてみる！」

こつちに矛先が回ってきた。ぼけーつとしていたからだだろうか。とりあえず立つ。しかし問題なんて聞いて無い。黒板にも書いていない。どうやら悪谷が消いたらしい。この野郎。

禮夜は心の中で悪谷に悪態をついた。しかし今はそれどころではな

い。こいつの問題には答えないと評定を下げられるのだ。そのため問題には答えないとやばい。でも聞いて無かったから答えられない。この場合はどうすればよいのだろう？

不意に目の前がブラックアウトする。でも一瞬のことだった。

「…正解だ。座つてよし。」

心底悔しそうにしながら次のページに入る。周りの生徒のささやかな歓声が聞こえる。

何が起こったのか意味が分からないものの、言われたとおりに座る。結局その授業で謎が解けることは無かった。

▼ ▲ ▼ ▲

待ちに待った放課後。いつもならもっと喜べるはずなのになんとなく喜べない。テンションがいつも上がらない。

「ちょっと禮夜、さっきの授業のときすごかったね。かつこよかったよ。」

そう話しかけてきたのは長瀬由梨^{ながせゆり}だった。さっき…つまり意識が無くなった時の授業だろう。

「ごめん、由梨。ボクその時のこと覚えてないんだ。というかあの時にボクは何をしたの？」

「はあ？あんた覚えてないの？信じられない。本当に何も？あんた私をはめようとしてる訳じゃないよね？」

「うん。というかどれだけ疑うのさ。」

禮夜がそういうと、由梨は溜息をつきながら簡単に話し始めた。

「そりや疑うよ。…まあいつか。教えてあげる。本当信じられないよ、禮夜、あんた悪谷に当てられたでしょ？最初はあんた戸惑ってたみたいに見えたんだけど、途中から…何て言うのかな…そう、急に自信满满になった感じっていうか…まあそこはいいや。その後、その消された問題の答えを言ったんだけど…その問題が大学生レベルの問題だったらいいんだよね。だからみんなおーって感じで…まあそんなところ。」

「つまりボクが大学生レベルの問題をあの授業で答えたと。」

「簡潔に言うとな…てか私がかんばって言ったことをそんな簡単にまとめないでほしいんだけど？なんかみじめでしょ。あ、それとね、今ほかの学校の女の子が行方不明らしくて……」

由梨の言葉を見無視する。別にまとめようがまとめ無かろうが由梨に関係する事じゃない。それにそんなことは、まったくもって問題じゃない。

問題なのは意識が無い間にあの問題を解いたこと、そしてその記憶が全くないこと。これはどういうことなのだろうか？

しかしどうせ禮夜にとっては得となることだったのだから、別にそこまで気にすることでもない。

「まあ、いつかあ。」

「全然良くない!!」

「何が？」

「全て！」

由梨が勝手に怒っているのを禮夜は眺めていた。何がしたいのだろうか？怒ることによって、何が変わるのだろうか？

禮夜は思考を止めると荷物をまとめて立ち上がった。それに合わせて黒く長い髪の毛がかるく揺れる。

「禮夜？あんた何してんの？」

「帰る。」

「はあ！？あんた何勝手に帰ろうとしてんの！？」

またしても由梨を無視して廊下に出る。昇降口まで響いていた由梨の声は聞かなかったことにしておいた。

▼▲ ▼▲

禮夜は家に帰る道を歩いていた。禮夜の家はこの辺ではめずらしい和風の家である。何でも昔はこのあたりの大地主だったらしい。しかし、それも昔の話だ。

「ただいま。」

返事はない。当たり前だろう。

両親はある事件に巻き込まれ、七年前に他界し、ここまで育てくれた祖父も去年他界した。

そのためこの家には禮夜一人しか住んでいない。

…一人と言うのとは違うが。一応何人かの使用人が住んでいる。し

かし今は休養をとらせている。

今日は何もかもがめんどくさい。すぐに部屋に戻り、着替え、布団に入った。

結局あの授業の時に何が起きたのだろうか。

思考が始めるがすぐに中断する。

眠い。

そこから禮夜の記憶は無くなった。

02（前書き）

現実逃避をするために投稿しました。

次の土曜日にも多分更新すると思います。

ふと気がつくと、部屋の中が明るかった。いつの間にか眠ってしまったらしい。

時計を見ると六時三十分、朝が苦手な禮夜にしては早い。もうひと眠りしようと思ったが、完全に目が冴えてしまっていて、眠れない。音楽でも聞いて時間を潰そうかと思ったが、充電が切れていた。昨日充電をするのを忘れていた。

しょうがなくテレビを見ていたが、面白い番組は無かった。

時計を見る。今は七時。さっきから三十分しか経っていない。

仕方がないので、ジャージからセーラー服に着替え、学校の用意をし、家を出た。

▼▲ ▼▲

外は明るかった。

禮夜はあてもなく外を歩いてみる。

「何で一人の時にこんなに早く目が覚めるんだよ……今日は八時くらいに起きるつもりだったのに。」

禮夜は朝に弱い。そのため七時半以降に起きるのは、最早日課となっている。

なんとなく歩いていると、いつのまにか、学校の裏山に来ていた。高校に裏山があるというのも変な話だが。

いつもは見ているだけだったが、今日はちょっと探検しようと思っ

▼▲ ▼▲

裏山に広がっている森林は思っていたよりも広く、まるで何かを追悼しているような感じだった。膨大な数の何かを。

森林を進むと、奥に洞窟があった。覗いてみると、大人が五、六人くらいは入れそうだった。何故こんなところに洞窟があるのだろうか？何かに使ったのだろうか？

そういえばこの辺は戦争の時の防空壕がどこに残っていると噂で聞いたことがある。その残骸なのだろうか？

まさかこの山自体が戦争の産物だというのだろうか？

もしも思っている通りだったらこの学校は何故こんなところに建てられたのだろうか？

不意に後ろから物音がする。

驚いて振り向くが、そこには何もいなかった。探りたい気持ちもあったが、ちょうど登校の時間になってしまっている。

少し恨めしく思いながらも禮夜は裏山を後にした。

▼▲ ▼▲

登校して数分後、河崎が話しかけてきた。

「ちょっと今時間あるか？」

「あるけど。」

「じゃあちよつと来い。」

何だろうと思いつながら河崎についていった。

しかし、ついていく最中、何故だか不穏な空気がした。何か悪いことが起きる…そう直感したのだ。理屈は無い。ただの思い違い、そう思いたかった。

考え事をしながら歩いていると、河崎の歩みが止まった。そこは、裏山の前だった。

「お前、朝ここにいただろ。」

何故河崎がそのことを知っているのかは分からないが、不審に思いながらも質問に答える。

「いたけど。」

「じゃあその近辺に洞窟があつたか？」

「あつたけど。それが……」

どうかしたのか？と続けようとした時、いきなり河崎に殴られる。口の中で血の味がする。殴られたときに切ってしまったらしい。

「何だよ、いきなり……」

河崎はこつちを睨みながら言った。

「ここにくんな。」

「は？」

「ここはお前が来ていい場所じゃねえんだよ！」

河崎は「いいか、絶対近づくんじゃねえよ。」と言いながら帰って行った。

禮夜はさっき見たものを思い出しながら、河崎のさっきまでいた場

所を見ていた。

禮夜は時計を見る。

授業開始まであと五分。今から行かないと間に合わないだろう。しかし、禮夜は時間という概念に縛られることはない。禮夜はためらわず、裏山に入った。

03（前書き）

このところ、朝寒いですね。布団から出たくなりません。

朝に行った洞窟まで行く。さっきと同じ道…一本しかない道を通る。この道を外れれば、ここから出るのは至難の業となるだろう。

朝に来た洞窟につく。洞窟の後ろからは同じように物音がする。何かが動いている音だった。人間でなければいいのだが。

しかし禮夜の嫌な予想は對外当たってしまう。今回もその通りだった。

物音のした場所、そこには制服を着た女子生徒がいた。と言っても鎖で身体を地面に繋がれていて、目と口には布が巻かれているが。禮夜は素早く布を外す。

「ちょっとじつとしていて。」

禮夜は制服を漁る。スカートのポケットに、小刀が入っていた。禮夜はそれを取り出すと、日本刀のように使って、鎖を切ってしまった。普通、小刀で鎖は切れない。しかしこれにはコツがあり、それさえわかっていれば、切ることなど簡単だ。

女生徒を解放する。ブレザー型の制服。禮夜の通っている高校の生徒ではないらしい。

「キミ、名前は？」

女生徒は泣いているので答えようとしない。ここで禮夜は質問を変える。

「一人で歩ける？」

この質問には泣きながらだが首を縦に振り、立ち上がる。

裏山を出て少女を警察署に預ける。親がすぐに迎えにくるらしい。

警察からの質問は適当に理由をつけて切り上げた。

警察署から出た時には、すでに二時間目の授業が始まっていた。学校に向かいながら考える。

禮夜の直感は当たってしまった。しかし、これだけで終わるとは限らないのだ。もしかしたら何か重大な事件が起こるかもしれない。

しかし禮夜には止める力がない。今はそれが起きないことを祈るばかりなのだ。

そんな風に思いながらも学校へと向かった。

04（前書き）

この頃毎日眠いです。

やっぱり早く寝たほうがいいんですね。

放課後、由梨に話しかけられる。

「ちょっと禮夜、何で今日遅れてきたの？ってちょっとあんた、顔どうしたの！？ちょっと見せて！どうしたのよ、これ。」

最初は答えるのを渋っていたが、あまりに由梨がしつこいので、思わず今朝のことを言ってしまった。

すると、由梨はいきなり立ち上がり机を殴りつけた。机は派手な音を立てる。

教室にいた生徒たちがぎょつとしてこっちを見た。

「河崎め…女子を殴るとは…しかもよりにもよって禮夜を…」

「お、おい…由梨…」

「絶対許さん！ぶちのめしてやる！」

由梨は唸るようにいいながら、教室を走って出て行った。多分河崎のところに向かったのだろう。由梨は一見弱そうに見えても、実際は柔道の黒帯を持っている。男子でも柔道で由梨に勝てる者はいない。

止めなければどうなるのだろうか。

一つだけ分かっているのは河崎が大怪我をするということだけだ。ということは、その前に由梨を止めなければならない。

しかし止めるにしても由梨と河崎はどこにいるのだろうか？

そう悩んでいると、急に教室の扉が開いた。そこから入ってきた一人の男子生徒が興奮した様子で言う。

「おい！河崎と長瀬がガチバトルするかもしれないぞ！」

それを聞いて、教室にいた生徒はその男子生徒にどこにいるのかと問いただした。男子生徒が簡潔に校庭と言つと全員我先に、という感じで校庭に走って行つた。こんなに早く騒ぎになるなんて思わなかった。このままでは警察沙汰になってしまう可能性が高い。それほどに今由梨は怒っているのだ。こんなことで。

一刻も早く行かなければ。

それだけ考えて禮夜は窓に駆け寄り、二階の窓から飛び降りた。驚異的な身体能力を生かし、綺麗に下の地面に着地した禮夜は、二人がいるという校庭に向かった。

▼▲ ▼▲

校庭では由梨が河崎の胸倉をつかみ何か怒鳴っていた。何を言っているのかはここからでは分からないが、二人とも、ひどく興奮しているのは確かだ。

このままでは本当に警察沙汰…傷害事件に発展してしまうかもしれない。そんなことになったら当事者は勿論、この学校まで評判が落ちてしまう。この学校は日本でも有名な名門校なため、そんなことになったらどうなるかは目に見えている。

しかし、そんなことは何も考えていないのか、周りで見ている生徒はおもしろがつているようだった。

ここまで考えて、ふと河崎の右手を見た時、禮夜の顔色が変化した。自分でも青くなっているのが分かる。河崎の右手、そこには…カッターがあつた。ご丁寧にも新しい刃に変わっている。

新しい刃に変わっている。……つまり、もともと誰かを傷つけるつもりだったのだろうか？

しかし今はそんなことはどうでもいい。いつ河崎があれを振り上げ

るか分からないのだ。何より、まだ周りが気付いていない。由梨もだ。あのままでは避けるに避けられないだろう。

禮夜は二人のところに向かって気付かれないようにゆっくりと近づきだした。走ってもよかったが、禮夜に気付いてカッターで由梨が刺されても困る。禮夜が移動している間も二人は言い争いを続けていた。

あと数十メートルのところまで来たとき、河崎が何か言い始めた。

「…うつせえよ。」

「…何？」

「うつせえって言うてんだろ！さつきから黒輝のことばかり言いやがって！うぜえんだよ！」

そう言いながらカッターを由梨に向かって振り上げる河崎。ここで由梨や周りの生徒もカッターの存在に気付き始めた。

由梨はカッターを見て後ずさりした。しかし河崎がその距離を縮める。禮夜はここで走り始めた。

校舎側がさつきから騒がしい。何をしているのだろうか？

「さつきと死ねよ！お前なんかこの世にいらねえんだよ！」

河崎が由梨に向かってカッターを振り上げる。

由梨は逃げようとしたが、河崎のほうが行動は早く、先回りされてしまい、由梨は逃げるができなくなってしまった。

カッターが振り下ろされる。カッターは、ちょうど由梨の首筋：頸動脈に狙いを定めていた。

カッターが由梨の頸動脈を切り裂こうとする寸前、禮夜は間一髪で間に合い、由梨を右手でつかみ、そのままいっしょに地面に倒れた。

とりあえず刺されてはいないらしい。

しかし河崎はまだ由梨に狙いを定めていた。今度は由梨の顔に、もう一度カッターが振り下ろされる。

禮夜は反射的に右腕を由梨の顔の前に出して庇った。

その直後、右腕が熱くなつた。しかしそれもつかの間、鋭い痛みが走る。

河崎が振り下ろしたカッターが禮夜の右腕を貫いていた。

傷口から血が滴り落ち、由梨の頬辺りに落ちる。由梨の頬に落ちたそれは首筋を伝い、地面に落ちた。

禮夜は左手で由梨の手をとり、無理やり立ち上がらせた。このままでは倒れたままになると考えたからだ。

遠巻きに見ていた生徒たちが禮夜の腕から滴り落ちる血に気付き、微かに悲鳴が上げた。

河崎は顔色を変えてよろよろと後ろに後ずさりした後、その場でどさりと音を立てて地面にしりもちをついた。

由梨は顔に落ちた禮夜の血を触った後、カッターが貫いたままの禮夜の右腕をぼんやりと眺めた後に、その場にへたり込んだ。

「……血…血が出てる…早く止血を…」

由梨の声は震えていた。そのためうまく聞き取れない。しかし、ひどく心配しているのだけは分かった。

「大丈夫。」

とりあえず安心させるために明るい声音で言っていると河崎の方を見た。河崎は恐怖の籠った目で禮夜のことを見ていた。まるで化け物を見ているようだ。

「河崎。」

河崎は何も言わなかった。いや、言えなかったという方が正しいの
だろう。

「本気で殺そうとするのはよくないね。でもこれも立派な殺人未遂
だ。まあ傷害事件になっちゃったけどね。」

そう言ったときに後ろから複数の足跡が聞こえた。振り向くと何人
かの生徒と先生が来た。

「ちよつと、貴方達は何をしているの！三人とも職員室に……」

そこまで言ったところで先生が息を呑むのが分かった。いっしょに
いた生徒たちは悲鳴を上げた。全員、禮夜の傷を見ていた。

右腕から滴り落ちた血は、校庭の砂に奇妙な模様を描いていた。そ
の場の砂は赤黒い血によって凝固し、そこだけ赤かった。

「……職員室は結構です。とりあえず黒輝さん、保健室に行きましよ
う。長瀬さんもいっしょに来て下さい。川崎君はとりあえず教室に
戻りなさい。」

禮夜はその言葉に黙って頷くと、由梨に声をかける。

「由梨、行くよ。」

「……」

「由梨！」

それでも由梨は動かずに、禮夜の右腕を見て、がたがたと震えてい

た。禮夜は溜息をついてその場にしゃがんだ。

「由梨、ボクは大丈夫だよ。…一緒に行こう?」

「…」

由梨に左手を差し出すと、由梨は無言でその手を取り、立ち上がった。禮夜は行く直前に校庭を見た。さっきまでのことが嘘のように、そこは静寂に包まれていた。

05（前書き）

本格的に寒くなって来ましたね。地域にもよりますが。

私は寒いのが苦手なのに冬は好きなんですよね。矛盾している気もしますが（笑）

「…さて、黒輝さんの怪我の手当ても終わったし、何があったのか教えてもらえる？」

保健室で手当てが終わった後、禮夜達を保健室に連れてきた横峰羽よこみねは昏ぐれにさっきのことについて質問される。

「……」

禮夜はそこまで話したいことでもなかったため、黙っていた。由梨はさっきから黙ったままだった。ずっと自分の足元だけを見ている。その光景を見て、横峰は溜息について椅子に座りなおした。

「…どっちかが話してくれないと教室に戻れないわよ。」

禮夜は横に座っている由梨を見た。由梨はこっちも見ずに、さっきと同じように、ただ下を見ていた。由梨が話す気配は一向に無い。それを見て禮夜は横峰の方を見て朝に起こったことからさっきの事件のことまで全部話し始めた。

しかしあの山が昔何だったのかは聞かないで置いた。まだ聞くべき時ではないと思ったからである。

全部聞き終えて、横峰はもう一度溜息をついた。

「そう、あの山にね…」

横峰はそれだけ言うと立ち上がり、禮夜達に教室に戻るようにと告げた。

禮夜は立ち上がったが、由梨は立ち上がらなかった。

「由梨。」

声をかけても反応しない。

それを見て横峰は禮夜に声をかけた。

「長瀬さんは少し保健室で休ませましょう。少し時間がたったら私が教室に連れて行くので。」

「分かりました。」

それだけ言って保健室から出ようとすると、横峰が耳打ちをしてきた。

「今日の朝に見たものは誰にも話さないように。考えていることも……もしも私が思っている通りだとしたらあの山について調べなければならぬので。」

それだけ言って、横峰は保健室のドアを閉めた。
禮夜は廊下にある窓から空を見た。今にも雨が降ってきそうな、どんよりと暗い空だった。

▼▲ ▼▲

帰り道を急ぎながら禮夜は考え事をしていた。あの山のことも、学校のことも、由梨のことも。

結局、由梨は教室に戻ってこなかった。確かに由梨は血が苦手だった。しかしあの反応は今まで見たことが無かった。

まるで昔、何かあったかのような……身内が傷つくようなことが。

由梨の目の前で何かが起きたのだろうか。禮夜が知らないことが。

そうなのだとすれば、その記憶を思い起こしてしまったのだったら、血を見せるようなことをしなければよかったのかもしれない。

もしかしたら助けなくても大丈夫だったのかもしれない。庇う以外にも選択肢があったのではないだろうか。

しかし過去は変えられない。過ぎてしまったことはしょうがないのだ。

腕に冷たいものが当たる。いつの間にか雨が降ってきていたのだ。

禮夜は思考を止め、速足で家へと向かった。

▼ ▲ ▼ ▲

家に帰った時にはずぶ濡れになっていた。急いで自分の部屋に戻る途中、居間にある日本刀が目に入った。

禮夜の祖父、黒輝誠治朗くろきせいじろうが大切にしていた妖刀だ。禮夜はそれを少

しの間眺めると、そのまま部屋に戻った。

日本刀を見た時に何故か心が騒いだのを禮夜は感じ取っていた。

06（前書き）

何だか今年の冬は暖かいですね。今のところは。

過ごしやすいと言えはそれまでですが、何だか調子が狂うような気がします。

次の日、いつものように学校に行くとなぜかみんなが騒がしかった。どうしてこんなに騒々しいのかと首を捻っていると、由梨がちょうど通りかかって、まるで昨日何事も無かったかのようにこっちに声を掛けてきた。

「おはよう。ねえ由梨、なんかあったの？」

「大変なの。河崎が昨日から行方不明だって…」

「行方不明？」

禮夜は思わず聞き返してしまった。

別に驚いたわけではない。ただ、あまりにもタイミングが良すぎる気がしたのだ。このタイミングだと昨日の騒動の後にいなくなったようにも思える。

何かあったのだろうか？

「うん。警察は昨日のこと知らないから昨日のこととは結び付けてないらしいけど…でもなんだかみんな昨日のことで河崎は居なくなっただんじやないかと思ってる。」

「まあ…普通はそう考えるよな。」

しかし禮夜にはそう思えなかった。河崎が自分でいなくなったとは思えないのだ。何か事件に巻き込まれた可能性が高い。

「とにかく学校中大騒ぎ。それと…今日は先生たちに何か言われる

かもしれない。横峰先生が昨日のことうまく言っといってくれたと思うけど…でも分からない。もしかしたらほかの…何も知らない人たちに何か言われるかもしれない。特に禮夜は…」

そう言っつて由梨は下を向いた。気にしていないように見せていても、やはり昨日のことを引きずっているのだろう。

禮夜は少し笑った後に由梨に話しかけた。

「大丈夫だよ。何を言われようとも、それは心を持たない言葉。ボクの心には響かない。」

「でも昨日私があんな騒動を起こしたから…」

「それは禁句。」

禮夜は言葉を選ぶようにしてから由梨に言った。

「別にあれは由梨のせいじゃない。もともとボクがああの山にはいったことから始まったんだ。結局、自業自得だよ。」

その言葉を聞いて、由梨は禮夜を見た。さっきのような弱弱い視線ではなく、今度は禮夜を射抜くような視線だった。

「何で、禮夜は自分が傷つくことで他人を守ろうとするの？自分のことは大切じゃないの？」

禮夜は動きを止めた。そんな禮夜を、由梨は鋭い視線で見ている。それでも禮夜は身動き一つしなかった。

まるで禮夜の周りだけ時間が止まってしまったようだ。

どれくらい時間が経っただろうか？由梨がもう一度口を開こうとす

ると、禮夜がやっと喋った。

「由梨。」

「…何？」

「……それも禁句だ。」

やっと禮夜が紡いだ言葉に由梨は声を上げた。

「何で？私は思ったことを言っただけ。何故それを聞くことがいけないの？」

ずっと目を合わせていなかった禮夜が、由梨の方を見た。禮夜の目を見て由梨はたじろいだ。冷たく光っている禮夜の目は、全てを怯えさせることのできる目だった。

刈る者の目。

まさにそれだった。

「まだ話す時ではない。」

禮夜はそう冷たく言い放つと、いつも通りの表情に戻り、笑った。

「じゃあ教室に行こうか。」

「あ、うん。」

禮夜と由梨は教室へと向かった。

「……話す時が来れば…ただだね。」

禮夜の眩きは、由梨には届かなかった。

▼▲ ▼▲

四時間目が終わった後の昼休み、由梨と話していると、数人の女子生徒が二人の元へやってきた。全員気持ち悪いほどにやにやと笑っている。

何を言いに来たのかはすぐに分かった。

由梨がこつちを見て、どうすればいいかと目で訴えてきた。こういうのは無視するに限る。由梨にそう目で伝えると、由梨は頷いた。向こうは何も話しかけてこなかったため、禮夜達が無視して話し続けていると、しびれを切らしたのか向こうから不機嫌そうに話しかけてきた。

「ちょっと何無視してんの？」

禮夜はここではっきりと相手の顔を見た。そして由梨にもう一度目配せをすると、相手に話しかけた。

「何？こつちに用があったのか？何も言わないから分からなかったよ。」

禮夜がそう言うと、向こうは余計に機嫌を悪くした。

「ちょっと、そっちの立場分かってる訳？」

「立場とか関係ないんじゃないの？」

由梨がそう返すと、向こうは目配せをして二人の席の周りを囲んだ。

「何？ちよつと痛い目見ないと分からないの？」

そう言うのと、向こうの一人が由梨に向かって何かを投げた。

かなりの近距離だったため、普通の人間なら反応することはできなかったかもしれないが、禮夜と由梨はそこまで普通の女子生徒ではない。飛んできたものを自分の顔の前で受け止め、それが何なのかを確かめた。

「禮夜、これって…」

由梨に飛んできたものを見せられる。

「ああ、多分スタンガン。何でこんなもの持っているんだよ…」

そう、それはペンタイプのスタンガンだった。

今の時代、普通にネットに防犯グッズとして売っているが、この辺は比較的治安が良いため、スタンガンなんて必要のないものだ。しかも、それをよく見てみると、ほとんど使われていないことが分かった。多分新しく買ったのだろう。

「げ、電源入ってる。掴む場所によっては気絶するじゃん。」

そう言うって電源を切り、手で弄ぶ由梨。禮夜は、顔が引きつっている向こうを見据えた。

「何するつもりだったのかは知らないけど、もうちよつと後先考えた方がいいよ？…スタンガンは先生に渡すから。もう少しで授業始まるからさっさと自分の席に戻れ。」

有無を言わさぬ口調で命じると、案外素直に帰って行った。禮夜は

由梨からスタンガンを預かると、横峰の元に向かった。

07（前書き）

今回でとりあえず六月は終わりになります。

七月は長くなりそうです（汗）

「教室でそんなことがねえ…今の高校生は怖いわね。スタンガンなんて。」

「まだ刃物じゃなかっただけいいじゃないですか。多分ボクならナイフ投げていましたね。」

「…貴女の方が怖いわね。」

禮夜と横峰はほかの生徒が五時間目の授業を受けている中、進路指導室を貸し切り、二人で紅茶を飲みながら話をしていた。

さつきスタンガンを見せながら事の顛末を話したのだが、横峰は怪我人がいなければいいと言って、今回のことは黙っておくと言った。

「……そんなに怖いでしょうか？」

「ええ。ちよつとした犯罪者よりもね。まあその話は置いておいて……」

横峰は紅茶を一口のんだ後に禮夜に尋ねた。

「ちよつと今回は聞きたいことがあるの。」

「何でしょう?」

「貴女のお祖父さんのことよ。」

紅茶を飲もうとしていた禮夜は、カップに口をつけた状態のままで

止まった。

まさか祖父のことを聞かれるとは思ってもいなかったのだ。禮夜は紅茶を飲まずにカップを机に置き、横峰の目を見た。

そこに感情は浮かんていなかった。

この人は自分のことを試している、そう思った。

「……何が聞きたいのか言ってもらわないと困りますね。」

「全体的に。」

「それなら話すことはありません。」

もともと何を聞かれても禮夜の家系のことを話すつもりはなかった。話しても無意味なものであるし、何より他人が知っても何の得にもならない。ならば話す必要はない訳だ。

禮夜がそう言うのと、横峰は追求せずに、それならいいと言って何も言わなかった。

静寂が禮夜達を包む。

静寂は嫌いではない。逆に落ち着く。別にずっとこのままでもいいと禮夜は思った。

しばし時間が経った後、横峰が急に何かを思い出したかのようにこちらを見た。

「そういえば貴女に話そうと思っていたことがあったの。行方不明になっていた河崎君だけど……さっき警察から連絡が入って……遺体で見つかったそうよ。」

「そうですか……」

とりあえず悲しそうな声音で返事を返したものの、河崎が死んだこ

とはそこまで悲しんでいない。

多分あの事件以来、人の死に鈍感になっているのかもしれない。それに行方不明になった時点で、生きている可能性は低いと思っていた。覚悟ができていた…というのも変だが、まあそんな感じだろう。

「それと…見つかった場所がこの学校の裏山で…」

「…」

「貴女の見た洞窟…らしいわ。」

裏山にあった洞窟。

まるで誰かが隠れる為に作られたようなものだったのを禮夜は思い出した。そしてあの女子高生が監禁されていた場所の近くでもある。

「それと絞殺されていたらしいの。あと遺体の近くには百日草が置いてあったらしいわ。」

「百日草…」

「警察は犯人の置き土産と考えているらしいけどね、でも分からないらしくて。」

「花言葉。」

紅茶を一口飲むと、話を続ける。

「花言葉ですよ、ほら、それぞれの花にあるじゃないですか。クロツカスなら青春の喜び、ナデシコなら純愛や大胆、とか。」

「なるほどね…盲点だったかもしれないわ。では百日草の花言葉は？」

「亡き友を思う。」

「…つまりそれは死者を追悼していると考えていいのかしら。」

「多分。」

百日草、禮夜に母親が好きだった花だ。よく家の中に飾ってあった。禮夜的には彼岸花の方が好きなのだが、取り合ってくれなかったのを覚えている。

「百日草を置いていくなんて今の犯罪者も洒落てるのね。もしも私だったらそんな事思いつかないわ。」

横峰はそう言って紅茶を一口飲んだ。

「何で貴女はそのことを思いついたの？」

「何で…と言われても。」

禮夜はそう答えるとカップを机に置いた。

禮夜にも思いついた理由は分からない。単に思いついた、それだけだ。思いつきたくて思いついた訳じゃない。

実際、犯人が花言葉を意識しているのは当たっているのだろう。これも何となくわかる。

「…ボクは犯人と思考回路が似ているのでしょうか。」

「それは誰にも分からないわ。でも結局、貴女は貴方なのよ。ほかに変えようのない黒輝禮夜という人物。それだけ。」

禮夜は、すっかり冷たくなってしまった紅茶を一気に飲み下した。そんなことが聞きたかったのではない。ただ否定してほしかったのだ。違う、と言う一言さえ言ってくれば良かったのだ。

結局、自分の親族、祖父しか禮夜のことを分かっていなかった。それは一生変わることは無いのだろう。

チャイムの音が聞こえる。

それだけ考えると禮夜は立ち上がった。

「あら、もう行くの？」

「ええ。次は全校集会です。流石に遅れる訳にはいきませんので。」

「そう。それじゃあまた後で」

「はい。紅茶、おいしかったですよ。ありがとうございました。」

そう言って禮夜は生徒指導室から出た。

▼▲ ▼▲

「それでは、臨時の全校集会を行います。校長先生の話です。」

なんとなく全校がざわめいている中、全校集会は始まった。そこから話し声が聞こえてくる。いつもなら注意する筈だが、今回は誰も咎めない。

「ねえねえ禮夜、今回の全校集会って何だろ？やっぱり河崎のこと

かな……」

「多分ね。」

今河崎が死んでいると知っているのは生徒の中で禮夜だけらしい。
何故横峰が禮夜にそのことを教えたのか……事件のことを教えたのか……このごろ分らないことばかりだ。

禮夜ならば他言しないとも思っているのだろうか？

とにかく今は校長の話を聞くことにした。

「……生徒の中でもなんとなく感じている人もいますが行方不明になっている河崎伸太君ですが……今日の午後、遺体で見されたそうです。」

校長の言葉を聞いた瞬間に一斉にざわめく生徒。「あいつが？」とか、「嘘……この学校から死人が出ちゃったの？」などのみんなの声が聞こえる。教師陣はそんな生徒たちを抑えているようだ。

「……詳細は話せませんが……河崎君の為に黙祷を捧げましょう……」

全校生徒が黙祷を捧げている。所々ですすり泣きも聞こえる。

やはり河崎のことを嫌っていた奴らも死ぬのは悲しいのだろう。

隣にいる由梨を見る。由梨は真剣に黙祷を捧げている。禮夜もみんなと同じように捧げてみるが、どうしても心から、とはいかない。

やはり禮夜には人の死を追悼することができないのだろうか？

そんなことを考えている間に黙祷が終了する。

「それでは全校集会を終了します。各自ホームルームに戻り、担任の指示に従ってください。」

ぞろぞろと群れを成して帰っていく生徒。
禮夜はそれらが無表情で眺めていた。

「禮夜、帰ろう?」

「……ああ、分かった」

禮夜は由梨に背を向けると教室に戻ろうとした。しかしいきなり肩を由梨につかまれた。
驚いて後ろを見ると、由梨が心配そうな顔で禮夜のことを眺めていた。

「禮夜、気分でも悪いの?」

「は?何で?」

「いや、なんかいつもより静かだから……」

禮夜はまじまじと由梨の顔を見た。

「…由梨がボクのことを心配するなんて…明日季節外れの雪でも降るのかな?」

「ちょっとそれはひどいと思うけど?」

まじめに反発する由梨を見て、禮夜は盛大に吹き出した。
由梨が途中で何かを言っていたが、禮夜はそのまま笑い続けた。

01（前書き）

諸事情により昨日は投稿できませんでした。

「おはよう！ねえ、禮夜はお祭り行くよね！？」

「はあ？」

次の日に学校に行くと由梨がいきなり話しかけてきた。しかもかなりテンションが高い。しかし問題はそこじゃない。由梨は祭りに行くのかと聞いてきた。

「……祭りなんてあるっけ？」

祭りなんて禮夜の記憶の中には無い。と言っても禮夜は興味が無いので知らないだけかもしれないが。

「何言ってるの？明日は七夕！七夕祭りがあるの！」

「ふーん、七夕祭りねえ……」

正直人が集まる場所には行きたくないというのが本音だが、由梨は有無を言わさぬ口調でまくしたてる。

「ねえ、行こ行こ！」

「行くって…二人で？」

「そこは分かんないけど…あ、そうだ！奏たちも誘わない？」

奏たち、というのは三人の集団で、禮夜たちともそれなりに仲がい

いところである。ちなみに原見奏、はらみかなで 湯村洸、かたむらほのか 山西莉桜で形成されている。奏は髪の毛の長さはセミロングで茶色である。ちなみにクラスが変わることに髪の毛を染めているかと聞かれるらしい。洸はショートボブで全体的に幼い顔立ちだ。莉桜は、髪の毛を肩口辺りでそろえている。ちなみに足が速い。

この三人は禮夜が友人として認識している数少ない人間だ。

「奏たちか…それならいいか。」

禮夜としてもその三人にいてもらったほうが都合がいい。それなら行ってもいいと思っていると、次に由梨が言った言葉には一瞬耳を疑った。

「じゃあ私が誘つとくよ。浴衣着てきてよ。」

「…浴衣？」

「うん、浴衣。」

家にあるか記憶を探ってみたが、両親が死んでから一回も見たことが無い。

「…普段着じゃだめなの？」

「うん。」

一応確認するが、普段着は妥協してもらえそうにない。誘ってくる、と言いながら走り去っていく由梨。今回は自己中過ぎる逆に驚く。

「あーあ、じゃあ今日は授業途中で抜け出すかあ。」

学生らしからぬことを普通に言うと、エプロンを持って家庭科室に向かう。次の授業は家庭科で調理実習の筈だ。今回は裁縫じゃなくてじゃなくて本当に良かったと思っている。裁縫だったら由梨に手伝わされる羽目になる。由梨の不器用さは天下一品だ。

「禮夜ー！！」

「…」

とりあえず無視する。今の由梨はテンションが高すぎて何をするか分からない。しかしこの直後にこの選択は間違いだったと知る。

「無視すんな、馬鹿！！」

殺気を感じ、あてずっぽうにエプロンやら何やらが入った袋を後ろに向かってスイングする。バコンと派手な音が廊下に響き、その音の正体、というか後ろを振り返る。

そこでは由梨が顔を撫でながら立ち上がっているところだった。周りに人が居なかったのが幸いである。

「ちょっと！いきなりひどい！」

「殺気を出している奴にひどいと言われる筋合いはない。これは正当防衛だ。」

顔面に当たったくせにピンピンしている由梨。さっきの音は禮夜の聞き間違いだったのだろうか？

「正当防衛？それにしては行き過ぎ。女の子の顔面に当てるなんて失礼よ。それに…」

由梨を置いて今度こそ家庭科室に向かう。こんなことしていたら授業に遅れる。

ちなみに、由梨は授業に五分遅れてきた。家庭科の時間中文句を言われたが全部無視しておいた。

▼ ▲ ▼ ▲

帰り道、由梨といっしょに浴衣を見に来た。由梨に浴衣を買いに行こうと言われ、大して予定もなかったので由梨についてきた。実際選ぶ気は無かったが。

「あ、これ可愛い！あーでもこっちもいいな…」

由梨はさっきから精力的に浴衣を見ている。禮夜はそれを遠目に見ているだけだ。もともと買い物をする元気などなかったのである。

「ちょっと、禮夜も選んでる？ちゃんと選びなさいよ。あ、これもいい！」

「…ボクはもともと服になんて興味ないのに……」

とりあえず店内を一周してみる。そこまで心惹かれるものはない。そんな中、一枚だけ禮夜の目についたものがあった。紺地にえんじ色の大きめの牡丹が裾に描かれ、上の方には白色の小さい牡丹たくさん描かれている。帯は牡丹と同じえんじ色である。

とても美しく、しかし、どこか欠けているものだった。

何が欠けているのかは分からないが、ただ、そう思った。

「禮夜！」

後ろを振り向くと、由梨が一枚の浴衣を持っていた。由梨の浴衣は、禮夜と同じ紺地だが、ピンク色の桜が全体的に描かれている。ちなみに帯は桜と同じピンク色だ。

「決まったの？私はもう買おうと思ったけどどうする？」

ほかにも見ようかとも思ったが、これ以上見る気もないので買っことにした。

店から出ると、由梨はいかにも満足そうにしていた。

「そういえば禮夜はどんなの買ったの？ちゃんと見てなかった。」

「紺地にえんじ色と白色の牡丹。」

「へえ、禮夜に合ってるなあ。」

由梨は「早く浴衣の着方をマスターしなきゃ」と言っ、走り去っていった。禮夜も服の買物という、禮夜にとっては疲れることをしたため、さっさと帰ることにした。

02（前書き）

この頃この小説がどのくらいの量になるか考えています（笑）

次の日、禮夜は由梨の家で着付けをしていた。

「ねえ、これでいいかな？」

「いやそれ死装束だから。」

由梨は完全に左が上ではなく、右が上になっていた。由梨はこれから死ぬつもりらしい。

「ええー！！嘘！母さんにちゃんと右が上って教えてもらったのに！！」

「……そこから間違っているじゃないか。」

由梨は禮夜が来た時点で着付けを始めていたのに、禮夜の方が先に終わっている。

「手伝おうか？」

「いや、いいの！自分でやるのー！！」

「…子供かよ、お前は。これじゃあ小学生を勝っている…幼稚な面で。」

「ひどいー！」

由梨の抗議を無視して禮夜は外に出た。

「あ、ちよつと、どこ行くの！」

「外。」

「ちよつと、待…」

そんな声を無視して外に出る。七月の空気にしては少し肌寒い。でも、それが心地いい。とても、美しい夜だ。

強い風が吹く。黒く長い髪の毛がなびく。

空を眺める。天の川がとても美しく、空に掛かっている。

「禮夜——！」

後ろから禮夜を呼ぶ声が聞こえる。その声と共に近づいてくる足音。

「もう、置いてかないでよ。」

「ごめん。」

由梨の方を向く。今度は死装束になってない。ちなみに頭のお団子にかんざしを挿していた。由梨はさっきの禮夜と同じように空を眺めていた。

「空、星がとってもきれいだね。」

「ああ。」

由梨が空から目をはなし、こっちを向く。すると、禮夜を見てはったような顔になった。疑問に思い、話しかける。

「由梨？どうしたの？ボクの顔になにかついている？」

「禮夜…すごく…綺麗…」

「はい？」

一瞬耳を疑って聞き直したが、由梨はそれを気にも留めずに話を続ける。

「禮夜…昼と夜…雰囲気が違う。」

「どういう風に？」

「うーん…禮夜は夜が本当の姿っていうか…闇を纏ってる感じがなあ。でも…なんか夜に溶け込んで消えちゃいそうな感じもする。」

これじゃあ褒めているのか貶しているのか分かったものじゃない。でも確かに夜の方が禮夜には合っている気もする。

それに闇というのも…由梨が光なら禮夜は闇、由梨が昼なら禮夜は夜、お互いに正反対のもの。

禮夜と言う存在と由梨と言う存在。共通している部分はあっても結局は他人、同じ存在になんかなれないのだ。

もう一度空を眺める。天の川は、やはり美しい。しかし、美しくも儚い。人間も、星も、ほかの動物も、生きている者は全て美しく、儚い。

「禮夜？」

由梨がこつちを見ていた。

「どうしたの？」

「何でもない。それよりも早く行かないと奏達に怒られる。」

「ああー！そうだったあー！遅れたら怒られるー！」

そう言って走り出す由梨。もしも転んだらせつかくの綺麗な着物が台無しになる。

禮夜は少し笑うと、由梨の後をゆっくりと追った。

03（前書き）

この頃日にちによって温度差が激しいですね。
風邪をひいたらどうしようかと思っています。

「もう！あの二人は何やってるの！遅い！」

待ち合わせ場所には奏達がいた。やっぱり怒っている。

奏は紺地にボンボンの模様が描かれている浴衣を着ていた。

「別にそこまで怒らなくても…」

そう言っただけで庇ってくれたのは莉桜だった。莉桜は白地に紫色の花が全体的に描かれている着物だ。

「それよりリンゴ飴食べたい…」

そんなことをぼやいているのは洸だった。洸は薄い水色の地に花火のような模様が描かれている浴衣である。

「というか由梨いないし…まさか…迷子？この年になって？」

迷子なら迷子で構わないが、流石にこの年になっての迷子はものすごく恥ずかしいだろう。

由梨を待っているところくらい時間がかかるか分からないので、禮夜は奏達に後ろから近づき、声を掛けた。

「ごめん、遅くなった。」

「うわっ！？」

何故か大きな声を上げて驚く奏。こんなことで驚いていたら毎日驚

くことばかりだろうと思いながら右手を少し上げた。

「何だ、禮夜か…」

「こんばんは。その浴衣、すごく似合ってるよ。とても綺麗。」

「うん、上品な感じがする。でも禮夜には、綺麗、じゃなくて、綺麗、かも。」

「ああ、確かに。」

奏、莉桜、洸、莉桜の順番でしゃべっている。

「ありがとう。みんなも似合っているよ。ところで由梨知らない？
なんか先行っちゃったんだけど。」

それを聞いて奏は訝しげな顔をした。

「え、知らないけど…というか由梨から誘つという…」

「まあ落ち着いて…」

「じゃあ電話かける。」

そう言つて奏達に聞こえない場所に移動してから電話を掛けた。電源は切っていないと思いたい。

『もしもし。』

二回のコールで繋がる。

「今どこ。」

『え？今ボンボン釣りやってる。』

「アホか。」

さっきまで「早くいかなきゃ殺される。」とか喚いていたのは本当に由梨だったのかと疑いたくなる。莉桜と洸は大丈夫だろうが、奏が聞いたなら激怒するのは間違いないだろう。

「いいから早く来い。さっきまで奏に怒られると言っていたのはどこのどいつだ。」

『あ…忘れてた。』

「アホか。」

本日二回目である。

『ねえ…奏達、怒ってる…？』

奏達の様子を少し窺う。

「洸と莉桜はそこまでじゃないけど奏はもう爆発寸前。……機嫌治すためにリング飴とかき氷のいちご味、クレープのブルーベリー味を買ってきた方がいいかもね。」

『分かった！すぐ向かう！』

電話が切れたのを確認し、奏達の元に向かう。最初に莉桜が話しかけてきた。

「あ、どうだった？今どこだった？」

「由梨め…一人で先に遊んでたとか言ったら許さん。」

やはり由梨に電話したのは正解だったのだろう。もしもボンボンを持ったまま帰ってきていたら、最悪の七夕祭りになっているだろう。由梨にとって、だが。

「なんか親からはくれた子供といっしょに親捜していたら待ち合わせの時間に遅れたらしいよ。でもお詫びになんか買ってくるってさ。」

もちろんその場しのぎの嘘である。

「あー、それなら仕方ないと思う。」

「うん、それならしょうがない。」

ちなみにこれは莉桜、洸の言葉である。二人は納得したらしい。

「うーん…確かにしょうがないかもしれないけど…でも遅れてきたのは事実だし…でも…」

「……奏は子供がいても無視するんだな。」

「えっ！？そ、そんなことは……あるかも。」

「認めるのか…。」

と言っても禮夜も無視することがほとんどだと思うが。由梨だからこそ信用してもらえる嘘なのだ。

「二人とも、由梨、来たけど。」

「あれ？なんか持つてる。」

「お詫びじゃないの？さつき禮夜が言ってた。」

由梨はかなりのスピードで走ってきた。本当に由梨が来ているのは浴衣なのだろうか。浴衣とは思えないほどの速度で走っている。すぐにこっちに駆け付けた由梨は少し息を整えてから奏達を見た。

「みんな、ごめん！！これ、お詫びなんだけど…。」

由梨は教えた通りのものを買っていたようだ。リンゴ飴は洗に、かき氷は莉桜に、クレープは奏に渡していた。

「リンゴ飴！ありがとう。」

「ごめん、逆に気を使わせちゃったかも。」

「大丈夫、遅れてきた私が悪いんだし。」

「…なんで由梨はあたしが欲しいものが分かったの？」

「え！えー…と……。」

由梨は完全に言葉に詰まる。このままなるとどうなるかは目に見えているので、さりげなく助け舟を出す。

「どうせいつものカンだろう？ほら、由梨って案外カンがいいだろ？」

「そ、そう、カン！なんとなく買ってきたらみんなが欲しかったものだったの！」

「ふーん、まあいいや。それに今回遅れてきたのも許す！…理由がなければ多分ぶつとばしてたと思うけどね。」

「？うん。」

由梨は意味が分からないようで首を傾げている。

「とにかく行かない？」

「そうだな。」

とりあえず警察沙汰になるようなことは免れたらしい。ほっとしていると、由梨が三人に気付かれないように話しかけてきた。

「ねえ、みんなにどう言っでごまかしたの？」

「由梨が迷子の子供を助けたっていうことになってるから。なんか言われたら話、合わせろよ。」

「なるほど…了解。」

由梨が意地悪そうに微笑むのを見て、禮夜も示し合わせたかのように笑い、奏達の後について行った。

▼▲ ▼▲

三十分後、禮夜達は祭りの行われている場所をほとんど回り、とりあえず、最初の待ち合わせ場所に來ていた。少し変わっていたのは、奏と莉桜が、金魚が6、7匹入っている袋を持っていること、洸が左手にリンゴ飴を二本、右手にいちご味のクレープを持っていること、そして由梨が両手で抱えるほどのクマのぬいぐるみを嬉々とした表情で持っていることである。ちなみに禮夜はアイスクリームを食べていた。

「一通り回ったよね、結構楽しめたかな。」

「そうだね、たくさんお菓子買えたし。」

「私は見てる方が楽しかったかな。禮夜の射的はすごかったよね。」

「ああー確かに。本当にこのぬいぐるみが取れるとは思わなかったし。」

「あのおじさん、ある意味可哀想だったな…」

みんな由梨の持っているクマのぬいぐるみを見ながら言った。このぬいぐるみは禮夜が射的でとったもので、由梨に懇願されてとったものだ。

「あんなの簡単だ。生きているものに当てる訳じゃないんだからな。」

そう言ってから失言だったと気づいた。みんなの視線が痛い。

「生きているものって… 禮夜、一体何してたの？」

奏が興味津々、という感じで聞いてくる。奏だけではない、洸や莉桜は勿論のこと、禮夜のことを比較的知っている方の由梨でさえも目を輝かせている。

「……ボクの祖父、狩猟も趣味だったから…」

「はあ!？」

みごとに全員の声が揃う。やはり全員狩猟が趣味なんていう人物を見たことがないのだろう。

「狩猟って…どこで？」

由梨に聞かれる。

「ボクの家が管理している山。」

「……そんな簡単に言わないでよ。」

奏が溜息交じりに言った。由梨は苦笑いしている様であったし、洸はいつも通りにぼけーっとしていて莉桜は少し驚いている様だった。

「多分キミ達じゃなきゃ言わなかったと思うけどね。」

禮夜は周りに聞こえないように少しぼやいてから溜息をつく。そん

なとき

「あらあ？奏さんたちではありませんかあ。あなたたちもここに来ていたのですかあ？それならあたしも誘ってくださいばよかったのに。」

なんていう、うざったらしい声が聞こえてきた。しかも名指しで。

「…無視って行こうか。」

「うん、それが得策だと思う。」

その声を発している人物の正体が誰か知っている禮夜達は、聞こえないふりをして、さっさと行こうとした。

「ちょっとお、無視するのぉ？そんなことしたらあたし怒っちゃうよあ。」

「きもい、とにかくきもい。」

「うざい…」

由梨と奏が本当に嫌そうに言う。そいつの姿を見るのは禮夜を除く四人が嫌そうだったが、その声を聞く方が億劫だったので、しょうがなく振り向く。

「やっぱり…」

由梨が苦虫を噛みつぶしたような顔をして言った。その声の正体は、全員が想像していた通り、禮夜達の通っている学校の今までの歴史

の中で一番じゃないかとも思えるほどのぶりっ子、爛部吏子^{かんべりこ}だった。吏子の着物は、ショッキングピンクの地に、大きなでかいリボンとハート、しかもそこに一匹の金魚が描かれているという、作った奴のセンスを疑うような代物だった。髪の毛はサイドテールにして着物と同じ柄のでかいリボンで止めてある。これはもう、笑うのではなく、完全に引く。しかし何か違和感がある気がする。

「やゝつと振り向いてくれたのねえ、無視されてたのかと思ったの
お。」

「…単にあたし達が気付かなかっただけよ。」

「あらあ、そうなのお。」

禮夜はほかが吏子と話しているうちに吏子の浴衣を見ていた。もちろん柄ではなく、着方だ。吏子にばれないように見ているとあることに気付いた。そしてそれが確信に変わると、禮夜は一瞬だけ嘲笑した。どうすればこうなるのが良く理解できない、と言う意味も入っているのだろう。

禮夜のその一瞬の笑いに気付いたのか、吏子が禮夜に向かって聞いた。

「あらあ？禮夜さんは何笑っていたのお？ああ、そうかあ、あたしの浴衣が羨ましくなっちゃったのねえ。まあ無理もないことなのよ。これは特注で作ったものだからあ。どお？似合ってるでしょあ？まあ、あなたのその地味な浴衣よりは似合ってる筈よねえ？」

その言葉を聞いて、禮夜は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「残念だけど、そんな派手なのはボクには似合わないよ。そんなの

が似合うのはキミだけじゃないの？といってもほかの人達はそんなセンスを疑うような浴衣は着ようとも思わないと思うけど。ボクが言いたいのはキミがいろいろ間違っているってこと。特に着方。キミは死ぬ気なんだね。」

禮夜の言葉を聞いて、吏子は自分の浴衣をもう一度見直した。しかし、その間違いに気付かなかったのか、禮夜の方を見て首を傾げた。本人は可愛くやっているつもりなのだろうが、そんなものは見苦しいだけだ。

「ねえ禮夜、どこがおかしいの？」

「なんだ、全員気付いてないのか？あいつの浴衣を見てみるよ。」

全員吏子の浴衣を見る。

「もちろん、柄じゃない。見てほしいのは浴衣の着方。」

全員がじっと見ている中、由梨が突然笑い出した。しかも結構な大声で。全員訝しげに由梨を見ているが、由梨の笑いの発作は収まらない。

「気付いたか？」

「うん。ば、馬鹿過ぎる…。」

笑いを含みながら禮夜が尋ねると、由梨は涙目になりながら答えた。もちろん笑いによる涙である。しかしそこまで笑うのはどうだろうか？自分自身も一回そうなったことを忘れたのだろうか。

「何？何で由梨はそんなに笑ってるの？」

「あ、分かったかもしれない。」

「私も。」

奏が不満な声をあげる中、洸と莉桜は分かったようで、洸の表情はあまり変わっていないが、莉桜は下を向いている。多分、笑いを堪えているのだろう。

「言っていていい？」

洸が聞いてくるので了承の意を込めて頷く。すると洸も頷き、奏の為に説明する。もちろん吏子の為ではない。

「着物や浴衣って普通左前でしょ？」

「うん、当たり前でしょ？右上だったら死装束になるよ。」

「吏子の着物は右上？左上？」

奏は吏子の浴衣をじっと見ていたが、やがて由梨同様に大声で笑い出した。

「み、右上、あれじゃ死装束じゃん。ば、馬鹿だ……」

吏子を見ると、吏子自身も気付いたのか、顔を真っ赤にしている。ある意味可哀想な光景だった。

「……あなた達なんて嫌い！うざい！河崎君みたいに死んじゃえばいい」

いのよお！」

吏子は周りに他人がいらないのをいいことに喚き散らした。由梨と洸の表情は一瞬固まっただけで、あとは変わらなかった。莉桜は顔をしかめている。やはり全員にとっては屈辱とも取れるものなのだろうか。しかし、人間らしいものが少し欠如している禮夜にはやはり響かない。

「何だつて？」

しかし奏が強い口調で返す。禮夜は奏を少し見た後、全員より一歩後ろに下がった。このまま奏が何か問題を起こせば、後の二人もそれに加わる可能性が高い。由梨は加わらないとは思うが。この三人は一応友人だ。しかしめんどくさいことには関わりたくない。

「あんた、悪口しか言う能がない訳？」

奏が一步前に出る。強気な奏を見て何か思ったのか、洸が一步前に出た。

「…私も悪口言われて嫌な気持ちになった。」

一見何も思っていないように見えるが、その瞳は怒りに燃えている。禮夜は由梨と莉桜の様子を見た。由梨は吏子の方を、ただ見ていた。何を思っているのだろうか。一方莉桜はこれに加わるかどうか迷っている様だった。しかし気分を害しているのは確かだった。

「三人はどうするの？」

奏が吏子を睨みつけながらこちらに話しかけてきた。

「どうするって…何する気？」

由梨が奏に聞く。禮夜も奏の反応を待っていた。口で言っているも真意は違う可能性が高い。

「単に悪口を言うなって言うだけ。」

奏はこちらを見ずに言う。やはりその視線は吏子を見ている。

「…分かった。」

莉桜は奏に流され、一步前に進んだ。やはり友人というものを断ち切れないのだろう。一方由梨は何も言わない。後姿からは何を考えているのかは読み取れなかった。

「由梨と禮夜は？何も暴力的なことはしないよ？」

「嘘だね。」

奏の言葉に禮夜は否定した。禮夜は最初の時点ですでに奏の言葉の真意を読み取っていた。いや、真意ではない。人間が無意識のうちにしてしまうこと、それを読み取ったと言った方がいいのだろう。奏がゆっくりと禮夜の方を向いた。その視線は厳しかった。しかし禮夜は臆することなく、それを受け止めた。

「何でそう思うの？殴ったりも蹴ったりもしない。ただ注意するだけだよ？」

「奏、言葉の暴力って知っているか？」

奏は禮夜の言葉の真意が分からないのか訝しげな顔になった後に口を開いた。

「知ってるよ。でも何で？」

禮夜は由梨の方を見た。由梨は禮夜の方を向き、頷いた。

「身体的な影響を及ぼさなくても精神的な影響を及ぼすこともある。それはヒトという生物から生み出される言葉によってだ。それらを受けたものは精神を病むこともある。」

禮夜は、言葉を続ける。

「その後は…まあ分かんと思う。キミ達ならね。」

由梨は禮夜が話し終わった後、吏子の方にゆっくりと向かっていった。由梨は吏子の手を取ると、強引にその場所から引き離れた。それを確認すると禮夜は三人に向かって話しかけた。

「別にいいよ、いくら吏子がどうなるうとも、ボクに関係することじゃない。薄情とも思われそうだけど。でも、それでキミ達は満足するのか？それとも、正しいことを言っていると、優越感に浸るのか？」

禮夜は三人に向かって問いかけた。実際問いかけているのは禮夜ではないのかもしれない。しかし、そんなことは関係ないのだ。ただ話しかける、問いかける。それだけでいいのだ。

「キミ達はボクとは違う、未来ある人間なんだ。人間らしい、普通

の女子高生なんだよ。何でこんな風に気に入らないものを否定する？ボクにはそれが分からない。」

莉桜ははっとした顔になって下を向いた。何かを考えている様だった。洸はさっきまでの怒りが消え、逆に不安になっている様でもあった。

表情が何も変わっていないのは奏だった。逆にさっきよりも陰しさが増している。自分の考えを否定された者の顔、正にそれだった。

「…まるで何もかも分かっているかのような感じだね。何にも分かっ
てないくせに。分かったようなふりだけして！何が分かるっていうの！？」

「少なくとも、キミよりは。」

禮夜は、奏に一步近づいた。奏は禮夜を睨みつける。禮夜は何も感じていないかのように、平然としていた。その瞳に感情は浮かんでいなかった。

「何をあたしより知ってるって言うの？」

禮夜は少し黙ってから口を開いた。

「キミは親族の死を知らない。」

それを聞いて奏ははっとした顔になった。それに構わず禮夜は話を続ける。

「人間の醜い争いも、それによって死んでいった人間も、暴力も。」

それに、と続ける禮夜の顔には深い悲しみと怒りがあった。

「……自分の両親の死体を…キミは知らない…」

今でも思い浮かぶ、両親の無残な姿。気付いたらそこにいた。何故かはわからない。ただそこにいた。涙さえも出ず、ただそれを見つめていたのは覚えている。

「キミは知らないだろ。何もかも。その時の虚無感も、その後の悲しみも。」

禮夜が黙っても、誰も何も言わなかった。言えなかったのかもしれない。奏は無意識のうちに禮夜から離れていった。それでも禮夜は何も反応しなかった。ただ三人を眺めていたのだ。何も考えず、静かに。

その時、地面が揺れた気がした。一瞬地震が起きたのかと思った。しかし誰も何も驚いていなかった。地震ではない。禮夜自身が揺れているのだと気づいた。

反転する世界。

身体に響く衝撃。

衝撃と三人の反応から倒れたことが分かった。

暗転する世界。

誰の声も聞こえない。一人だけの世界。

もう一度だけ景色が映る。禮夜の元に駆け寄ってくる三人と、さっきまでいなかった由梨。

立ち上がる気力は無い。そして、眠い。

禮夜はそれに身を任せた。

禮夜の意識はゆっくりと闇の中に沈んでいった。

04（前書き）

眠い……とにかく眠いです（笑）

禮夜が次に見た景色はいつも見ている光景だった。

木の天井…自分の部屋の天井。禮夜は自分の部屋で寝ていたのだ。ゆっくりと身体を起こす。一瞬今までのことが全て夢かとも思ったが、浴衣を着ているため夢ではないらしい。

居間から誰かの声がある。知らない者の声ではない。いつも学校で聞いている声だ。着替えるのも面倒で、浴衣のままで居間に向かった。

▼▲ ▼▲

居間に向かうと、七夕祭りに行ったメンバーと、何故か横峰がいた。横峰は普段着だったが、ほかは全員浴衣のままだ。

雑談しているのかとも思ったが、その割には空気が重い。会話はそこまで大きな声ではなかったが、禮夜にとっては十分聞き取れる大きさだった。

「…それで、その後に禮夜が倒れて、そしたら丁度横峰先生が来た、と言うことです。」

横峰に事情を話していたところだったらしい。横峰はしきりと頷いていたが、それから少し考えるようにして、口を開いた。

「そう…今回はまだ何もしていない訳だしこちらで対処しておきます。」

「ありがとうございます。」

横峰がそう言うのと由梨が頭を下げた。そう言っ後、横峰が少し不安そうに言った。

「それよりも、勝手に黒輝さんの家に上がってよかったのかしら？」

「構いません。」

禮夜は、その声をかけながら居間に入った。横峰は禮夜を見て、一瞬驚いた顔になったが、すぐにいつもの優しそうな表情に戻った。

「そう。なら良かったわ。それより貴女は大丈夫？いきなり倒れたって聞いたけど。」

「ええ。ちよつとした眩暈です。意識もはつきりしていますから。」

禮夜はそう言うのと、横峰から目を離し、四人の方を見て笑った。

「もしも心配していたのならごめん。」

四人は何も言わなかった。禮夜もそれに対して何も言わなかった。

「でもボクはどうせ未来が無いし。心配しなくても構わない。」

それを聞いて、由梨が声を上げた。

「未来が無いってどういうこと？奏達にもそう言ってたみたいだし。」

「そつだよ！」

禮夜は由梨達が声を上げる様を、感情のない目で見ていた。未来が無い。

この単語が気になるのだろうか？

横峰を見る。横峰は意味が分かっているのかもしれない。しかし、一般人には分からないのだろうか？…そんなはずはない。ただここにいる禮夜の友人が分からないだけ。それだけだ。

「その言葉通りだ。ボクには未来が無いんだよ。」

「だからどういう…」

「選ぶ権利が無いんだ。」

禮夜がそう言うのと、由梨は一瞬言葉に詰まり、そして黙った。禮夜はそれに構わず話を続ける。

「ボクはどうせこの家を継がなければならない。この家の長子として生まれた以上、この運命は変えられない。ほかにやりたいことがあってもできないんだ。これを未来が無いと言うほかに何とさえいいんだ？」

禮夜はここにいる全員に話した。いや、訴えたと言った方がいいのだろう。この中にこの運命を変えられるものが居れば変えてほしい。しかしそれは無理な事。いくら他人の力を頼っても変えられないものはこの世にたくさんある。禮夜はそのことを物心つくときにはもう知っていた。禮夜は未来に希望を持っていないのだ。

「でも自分で変えられるかもしれないよ。」

洸が静かに言った。禮夜はその目を見た。その目には強い意志が宿

っていた。

「その運命に身を任せるんじゃないくて、その運命に抗えばいい。他力本願ではなく、自分の力で。」

洸は正論を言っているのだろう。禮夜にもそれくらいのことは分かる。しかし、洸は、ここにいる友人たちはその難しさを知らない。運命はどのように抗っても変えられないものがある。禮夜の抱えているものもそれだ。

「簡単に言っね。でもボクのは変えられないんだ。」

「何でそんなに簡単に諦めるの？諦めるのはまだ早いよ。」

「だって洸は運命を変えろということを試みたことがないだろ。」

「無いよ。でも私は運命を変えた人物を知ってる。この世界にたくさんいる。だから禮夜のも変えられる。」

禮夜は溜息をついた。やはり早すぎたのだろうか？それならばそれでもいい。どうせこの四人には関係のないことだ。禮夜以外、誰も関係ない。

「洸が知っている例は比較的自分で変えられる運命だ。ここに居る全員はボクの過去や家系を知らないから言えるんだ。」

「でも…」

まだ何か言いたげな洸に対して禮夜は溜息をついた。

「じゃあ聞くけど、洸の友人が目の前で死んでしまったと仮定しよう。そうだな…殺人鬼に殺された、って事で。相手はナイフを持っている。つまり洸の勝てない相手だ。そいつに友人は殺されている。キミは友人を助けたい。でも助けられない…」

「…何が言いたいの？」

「つまり、キミはこの友人が殺されるっていう運命を変えられるかってこと。勿論、自分だけで。」

そう言っていると、洸は下を向いた。これで運命を変えらるるということの難しさが分かっただろうか？ほかの三人を見る。やはり考え込んでいる様だった。こちらも気付いてくれただろうか？

時計を見る。九時三十分。長話をし過ぎた。

「…そろそろ全員帰った方がいいね。横峰先生、由梨達を家に送ってもらってもよろしいでしょうか？」

「ええ、構わないわ。じゃあみんな行きましょう。これ以上ここにいたら貴方達の両親が心配するわ。じゃあおやすみなさい。」

「はい。今日はいろいろとありがとうございました。」

横峰は四人を居間から連れ出した。その後すぐに扉の閉まる音がした。そして直にたくさんの声も聞こえなくなった。

禮夜は、ゆっくりとその場に座り、目を閉じた。そして自分以外の音が聞こえなくなるまで、そのまま目を閉じていた。

05（前書き）

今日で2011年も終わりですね。
来年はいい年になるといいですね。

次の日、教室に入ると真っ先に由梨が話しかけてきた。

「おはよう。…大丈夫?」

「大丈夫ってどういう意味で?」

「…いろいろ。」

やはり昨日の騒動を気にしているのだろう。奏達との騒動のことをでもそれなら由梨も奏達と同じ気分になっていたはずだ。

「それならボクの方が君たちに大丈夫かと聞きたいね。」

由梨はそれを聞いて、奏達の方を見た。禮夜も見る。奏達はいつも通りだ。しかし意識しているのか禮夜達の方は向かない。特に奏と洸は。莉桜もぎくしゃくした空気を感じ取っているのだろうか。二人に気付かれないようにこちらに不安そうな視線を向けている。由梨がこちらを向いたので、禮夜も由梨を見る。

「私と莉桜は大丈夫。でも奏と洸は…分からない。」

「まあね。昨日は言いすぎたかもしれない。」

禮夜がそう言うと、由梨は心配そうな目で禮夜を見てきた。

「もし禮夜と奏達の仲が悪くなったら…私はどっちの味方をすればいい?」

禮夜は少し黙ってから由梨に聞いた。

「由梨はどうしたいんだ？」

「どうしたいって？」

「どちらにつきたいのかってことだ。」

由梨はそれを聞いて黙り込んだ。禮夜は構わず話を続ける。

「ボクはできるだけそんな騒動は起こしたくない。でも向こうはもしかしたらボクのことを友人と見ずに敵対関係になるかもしれない。その時に由梨がどちらにつこうとも、それは由梨の自由だ。ボクたちが何かを言う権利は無いんだよ。もしそれを怖がっているんだつたら、向こうについた方がいい。」

禮夜がそう言うと、由梨は不安そうな目でこちらを見た。今度は自分の身の心配をしている目ではない。禮夜のことを心配しているのだ。

「でも…もし本当にそうになったらどうするの？もし私まであつちについたら禮夜の味方はいなくなるんだよ？」

禮夜は由梨の言葉を聞いて溜息をついた。禮夜のことを心配するのは間違いだ。今一番心配しなければいけないのは由梨なのだ。由梨は禮夜の弱みになると考えている人物が多い。ならば、もし思っている通りになってしまったら、奏達に狙われるのは由梨なのだ。多分、それに気付いていないのだろう。それなら教えるしかない。

「由梨、今はボクのことを心配するんじゃない、なくて自分の心配をした方がいい。」

「何で？」

禮夜が思っていることを告げると、由梨は、ありえない、と言う顔をした。それは禮夜の話の内容についてなのだろうか。何故かこの時だけは読み取ることができなかった。

「私は……」

由梨はそこで止まった。禮夜は立ち上がって奏達の方を見た。まだ喋っている。

一瞬奏と目が合う。

奏はすぐに目を逸らして話を続けた。しかし禮夜は奏の目に映っていた心情を完全に読み取っていた。怒りとも不安とも言えない、様々な感情が混同している状態。言ってしまうと、不安定な状態。

「禮夜？」

由梨が立ち上がっている禮夜に気付いた。禮夜は由梨に対してにやりと笑った。悪事を思いついた子供の様にも見えるし、無邪気にも見えた。

「由梨、こんな心配、必要なかったかもしれないぞ。」

「え？何で？」

「一緒に来れば分かる。」

そう言うと、禮夜は奏達に近づいた。奏達も気が付いたようだ。禮夜はあえて3mほど離れた場所で止まった。笑顔なのは変わらない。

「…一体何？」

奏が少し強めの口調で禮夜に問いただす。しかしそこに現れている感情は隠しようがない。少なくとも、禮夜には。

「何だと思う？」

奏は眉を顰めた。禮夜はまだ笑ったままだ。

「謝りにきたの？」

禮夜は鼻で笑った。

「謝らせに来たのさ。」

奏は意味が分からない、という顔をした。後ろにいる由梨を見る。由梨は禮夜を見ると、少し微笑んだ。意味が分かったのかもしれない。

「ボクにとっては数少ない友人なんでね。だから仲直りしようと思つて。」

「でも謝るのと謝らせるのは違うよ。」

「そうだね。」

禮夜はわざと謝る姿勢を見せなかった。禮夜が謝ってもよかった。しかし、それでは同じ轍を踏むことになるかもしれない。向こうに謝らせて、以前よりも強固な友情とやらを作らなければならない。

「何であたしたちが謝らなければいけないの？」

「仲直りするため。」

禮夜が悪びれもなく答えると、奏はその場で地団駄を踏んだ。

「それならそつちも悪いでしょ！」

「なら両方とも罪は変わらない。」

禮夜はやつとまじめな顔になった。

「それなら両方謝って終わりじゃないの？」

途中で洩が口をはさむ。どうして謝らないのか、と言いたそうな顔だ。

「奏が謝ったらこつちも謝るよ。」

禮夜が奏に対してにやりと笑った。勝ち誇ったかのような顔だ。

「…分かったよ。あの時は言いすぎました！ごめんなさい！これでいいんですよ！」

奏が謝ったのを見て、禮夜はさっきのような笑いではなく、見たも

のを恍惚とさせるような微笑を浮かべた。

「上出来。こっちも昨日はごめん。」

そう言った後、禮夜は由梨に耳打ちした。

「由梨、奏って何気ツンデレだと思わない？」

由梨はそれを聞いて少し考え込んだが、直に禮夜を見て、にっこりと笑った。肯定の意味が籠っているようだ。ということは由梨も認めたことになる。

「ちよつと、何由梨は笑ってるの？」

奏が声をかけてくる。禮夜は意地の悪い笑みを浮かべた。

「何でだと思っ？」

「分からないから聞いているんだけど？」

禮夜は答えを言わずに、洸と莉桜に、由梨に言ったことと全く同じことを耳打ちした。すると、洸は聞いた瞬間に頷き、莉桜は由梨と同じように少し考えてから肯定の意を出した。

「ちよつと！」

流石に奏が可哀想になってきたので勿体ぶりながら思ったことを伝える。すると奏は目を見開いて「ふざけないで！」と一喝して自分の席に戻っていった。その時に奏の耳辺りが赤くなっていたのは禮夜の気のせいだろうか？担任の横峰が教室に入ってきたため、この

話はお開きになったが、結局奏はこの日、由梨と洗にさんざんからかわれることになっていた。

帰りのSHRが終わった後、禮夜はすぐに帰る準備をしていた。もちろんあのぶりっ子に会わないようにするためである。七夕祭りのとき、禮夜はほとんど関わっていないが、奏達といたということで、何か面倒が起るかもしれない。未然に防げるものなら防ぎたい。

「禮夜、いっしょに帰ろう？…昨日のこともあるし。吏子に会いたくないんでしょ？」

「…よく分かったね。…じゃあ帰ろうか。」

由梨が禮夜に向かって笑いかけてきたので、禮夜は由梨に少し笑い返した。朝と同じような、恍惚とする微笑みだった。

「いつもの禮夜に戻ったかな？」

その笑みを見てか、由梨は満足そうに頷いていた。しかしその後は少し意外そうに話しかけてきた。

「禮夜、朝もそういう感じに笑ってたよね。…それやられたら男女構わず惚れるかもね。」

「やめてくれ、「冗談じゃない。」

そんな冗談を言いながら廊下を歩いていると、廊下の向こう側からある声が聞こえてきた。禮夜は歩みを速めて、その声の主の横をすり抜けようとした。

「ああ、黒輝さぁん。」

聞こえなかったふりをしてその横を通り抜ける。もちろん由梨も同じようにした。面倒はできるだけ避けたい。

「ちょっと禮夜さぁん。無視するなんてひどいんじゃないですかぁ？」

「……」

何も言わずに階段を降りようとした。周りもそれを気にしていない。逆に同情したような視線を向けてくる。禮夜にとっては、それが不快にしか思えなかった。

「…まあ、あ、そういえばあ、あたしいあなたの過去を調べたのぉ。もちろん家の権力でえ。」

この馬鹿は遂に犯罪に手を出したらしい。警察にこのことを話したら連行してくれるだろうか。そう思いながらも、禮夜は少しだけ歩く速度を遅くして、吏子の話が聞こえるようにした。何を調べたのかが気になったのだ。

「あなたあ、過去に肉親全員いなくなってるのよねえ？でもそれはあなたも気にしていないことだし。それよりあたしはすごい情報を手に入れたのぉ。」

「…ちょっと禮夜、無視してていいの？禮夜が言われたくないこと言われちゃうかもしれないよ。」

「構わない。」

どうせ立ち止まろうが、そのまま歩こうが、向こうは話すだろう。それなら立ち止まらなくてもいい。別に言われても構わない。

「立ち止まらないということは言っていないということですねえ？じやあ言いますけどお、禮夜さんは昔い、実の……」

「爛部さん！！」

後ろから誰かの声がかかった。禮夜も驚いて振り向くと、そこには横峰がいた。しかし、いつもの優しそうな表情ではなく、まさしく鬼の形相というような感じだった。

「他人の過去などのプライバシーをその人に許可なく調べることは違法です。ましてやそれをこんな大勢の生徒がいる中で言ってみなさい。訴えられるのは確実です。」

吏子は顔を歪めながら横峰に対して話しかけた。

「……だってえ、それを言うなら向こうが悪いんですよ。」

「いくら向こうが悪くても、貴方の行っていることの方が重罪です……後の話は職員室で聞きます。いっしょに来なさい。」

横峰は有無を言わずに吏子を職員室に連れて行った。その様子を見て、禮夜はほっと溜め息をついた。いくら構わないとは言っているても、流石に言われるのはまずい内容だと思ったためである。

「良かったね……でもあいつが言おうとしてたのって何だったんだ

る？……本当に禮夜のことだったの？」

「……多分ね。流石にまずいと思ったし。」

「じゃあ横峰先生が来てくれてよかったんだね。」

「まあ……そういうことになる。」

禮夜はそう言いながらも横峰について考えていた。

何故横峰は、あのタイミングでここに来たのだろう。

まるで禮夜の都合の悪いことを全てかき消してしまうかのよう。まるで禮夜のことをいつも見ているかのよう。

そう考えると少し寒気がする。

自分の知らないうちに誰かに見られている……これほど恐ろしいことはない。少なくとも、禮夜の中では。

「禮夜？どうしたの？」

「なんでもない。そろそろ帰ろうか。」

「よく分からないけど、分かった。」

そう言っつて禮夜は窓から空を見た。外は小雨が降っていた。

▼▲ ▼▲

「あの野郎！！」

家に帰った瞬間、禮夜は完全に叫んだ。この辺は家が少なく、間隔が離れている。そのためいくら喚いても近所迷惑にはならないので

ある。

「家の権力で調べられるなんてな、そんならこっちも調べてやるのか！？まったく、個人情報ば簡単に調べられるわけないだろ。ハツキングでもしたのかよ！」

一通り喚いた後、禮夜は溜息をついてゆっくりと居間に行った。居間の奥にある日本刀に目をやる。そして日本刀にゆっくりと近づき、日本刀を手に取る。そしてゆっくりと鞘から抜いた。

そこには飾り気のない、しかしとても美しく、少し紅く染まっている刀身があった。しかしそれはいつもと変わらない。その日本刀を少し眺めた後、鞘に入れ、元の位置に戻した。その後、禮夜は自分の部屋に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089x/>

儀式の夜

2012年1月7日08時46分発行